北村透谷詩集

北村透谷

青空文庫

夢中の夢

嗚呼かく弱き人ごゝろ、
嗚呼かく強き戀の情、

朝靄の歌

もらすなよあだうつくしの花、
消ゆる汝共に散るものを、
うつくしとても幾日經ぬべき、
盛りと見しははやすたり

春駒

第一　門出

北風に窓閉されて朝夕の
　伴となるもの書と爐火、
軒下の垂氷と共に心凍り
　眺めて學ぶ雪達摩、
　けふまでこそは梅櫻、
　霜の惱みに默しけれ。

霜柱きのふ解けたる其儘に
　朝風ぬるしけふ夜明け、
書の窓うぐひすの音に開かれて、
　顏さし出せば梅の香や、
　南か北か花見えず、
　いづこの杜に風の宿。

耳澄まし暫く聞けば鶯の音は
「春」てふものをおとづれぬ。
×　×　×　×　×　×　×
書とぢよ、筆措けかしといざなふは
　いづこに我をさそふらん。
　冬に慣れにし氣は結び、
　杖ひき出づる力なし。

〔この間見えず〕

ひとむち當てゝ急がなん。
　花ある方よ、わが行くは、
　ゆふべの夢の跡戀し。

第二　霞の中

來し道は細川までを限りにて
　霞に迷ひうせにけり、
春の駒ひとこゑ高く嘶けば、
　吾が身もやがて烟の中、
　戀にむせびてうなだるゝ、
　招きし花はいづこぞや。

夢にまでうつりし花の面影を
　訪ね來て見れば跡もなし、
深山路の人家もあらず聲もせぬ、
　廣野の中にわれひとり；
　かこつ泪や水の音、
　花ある方にそゝげかし。

おりたちて清水飮まする駒の背を
　撫でさすりつゝ又一ト鞭、

勇めどもいづれをあてとしらま弓；
　思ひ亂れて見る梢に、
　　鳥の鳴く音ぞかしましき。

立ち籠むる霞の彼方に驅入れば、
　小高き山に岩とがり、
枯枝は去歳の嵐に吹き折られ、
　其まゝ元梢に垂れかゝる；
　　さびしさ凄し、たれやたれ、
　われを欺き、春告げし。

駒かへしこなたの森の下道を、
　急ぎ降れば春雨の、
振りいでゝしよぼぬるゝわが足元を、
　かすかにはたく羽の音、
　　かなたへ隱れて間もあらず、
　鳴く聲きけば雉子なり。

春は來ぬ

今日はじめて春のあたゝかさ覺えぬ、
風なく日光いつもよりほがらなり、

地龍子

行脚の草鞋紐ゆるみぬ。
胸にまつはる悲しの戀も
思ひ疲るゝまゝに衰へぬ。
と見れば思ひまうけぬ所に
目新らしき花の園。

人のいやしき手にて作られし
物と變りて、百種の野花
思ひ〳〵に咲けるぞめでたき。
何やらん花の根に
うごめく物あり。
眼を下向けて見れば
地龍子（みゝず）なり。

みゝずのうた

この夏行脚してめぐりありけるとき、或朝ふとおもしろき草花の咲けるところに出でぬ。花を眺むるに餘念なき時、わが眼に入れるものあり、これ他の風流漢ならずして一蚯蚓なり。をかしきことありければ記しとめぬ。

わらじのひものゆるくなりぬ、
まだあさまだき日も高からかに、
ゆふべの夢のまださめやらで、
いそがしきかな吾が心、さても雲水の
身には恥かし夢の跡。

つぶやきながら結び果てゝ立上り、
歩むとすれば、いぶかしきかな、
われを留むる、今を盛りの草の花、
わが魂は先づ打ち入りて、物こそ忘れめ、
この花だにあらばうちもえ死なむ。

そこはふは誰(た)ぞ、わが花の下を、
答へはあらず、はひまはる、
わが花盗む心なりや、おのれくせもの、
思はずこぶしを打ち擧げて
うたんとすれば、「やよしばし。

「おのれは地下に棲みなれて
花のあぢ知るものならず；
今朝わが家を立出でゝより、
あさひのあつさに照らされて、
今唯だ歸らん家を求むるのみ。

「おのれは生れながらにめしひたり、
いづこをば家と定むるよしもなし。
朝出る家は夕べかへる家ならず、
花の下にもいばらの下にも
わが身はえらまず宿るなり。

「おのれは生れながらに鼻あらず、
人のむさしといふところをおのれは知らず、
人のちりあくた捨つるところに
われは極樂の露を吸ふ、
こゝより樂しきところあらず。

「きのふあるを知らず
あすあるをあげつらはず、
夜こそ物は樂しけれ、
草の根に宿借りて
歌とは知らず歌うたふ。」

やよやよみゝず説くことを止めて
おのがほとりに仇あるを見よ；
智慧者のほまれ世に高き
蟻こそ來たれ、近づきけれ、
心せよ、いましが家にいそぎ行きね。

「君よわが身は仇を見ず、
さはいへあつさの堪へがたきに、
いざかへんなん、わが家に、
そこには仇も來らまじ、安らかに、
またひとねむり貪らん。」

そのこといまだ終らぬに、
かしこき仇は早や背に上れり、
こゝを先途と飛び躍る、
いきほひ猛し、あな見事、
仇は土にぞうちつけらる。

あな笑止や小兵者、
今は心も強しいざまからむ；
うちまはる花の下、
惜しやいづこも土かたし、
入るべき穴のなきをいかん。

またもや仇の來らぬうちと
心せくさましをらしや；
かなたに迷ひ、こなたに惑ひ、
ゆきてはかへり、かへりては行く、
まだ歸るべき宿はなし。

やがて痍(いたみ)もおちつきし
敵はふたゝびまとひつく；
こゝぞと身を振り跳ねをどれば、
もろくも再びはね落され、
こなたを向きて後退(あとじさ)る。

二つ三つ四ついつしかに、敵の數の、
やうやく多くなりけらし、
こなたは未だ家あらず、
敵の陣は落ちなく布きて
こたびこそはと勇むつはもの。

疲れやしけむ立留まり、
こゝをいづこと打ち案ず；
いまを機會(しほ)ぞ、かゝれと敵は
むらがり寄るを、あはれ悟らず、
たちまち背には二つ三つ。

振り拂ひて行かんとすれば；

またも寄せ來る新手のつはもの；
蹈み止りて戰はんとすれば
寄手は雲霞のごとくに集りて、
幾度跳ねても拂ひつくせず。

あさひの高くなるまゝに、
つちのかわきはいやまして、
のどをうるほす露あらず、
悲しやはらばふ身にしあれば
あつさこよなう堪へがたし。

受けゝる手きずのいたみも
たゝかふごとになやみを増しぬ。
今は拂ふに由もなし、
爲すまゝにせよ、させて見む、
小兵奴らわが背にむらがり登れかし。

得たりと敵は馳せ登り、
たちまちに背を蓋ふほど；
くるしや許せと叫ぶとすれど、
聲なき身をばいかにせむ、
せむ術なくてたふれしまゝ。

おどろきあきれて手を差し伸ればパツと散り行く百千の蟻；

はや事果しかあはれなる、
先に聞し物語に心奪はれて、
救ひ得させず死なしけり。

ねむごろに土かきあげ、
塵にかへれとはうむりぬ。
うらむなよ、凡そ生とし生けるもの
いづれ塵にかへらざらん、
高きも卑きもこれを免(のが)れじ。

起き上ればこのかなしさを見ぬ振に、
前にも増せる花の色香；
汝(いまし)もいつしか散りざらむ、
散るときに思ひ合せよこの世には
いづれ絶えせぬ命ならめや。

一點星

眠りては覺め覺めては眠る秋の床、
結びては消え消えては結ぶ夢の跡。
　油や盡きし燈火の見る見る暗に成り行くに、
　なかなかに細りは行かぬ胸の思ぞあやしけれ。
罪なしと知れどもにくき枕をば、
かたへに抛(な)げて膝を立つれど、
　千々に亂るゝ麻糸の思ひを消さむ由はなし。
今見し夢を繰り回へし、
うらなふ行手の浪高く、
迷ひそめにし戀の港は何所なるらむ。
　立出て※(まど)をひらけば外(と)の方は、
　ゆきゝいそがし暴風雨を誘(さそ)ふ雲の足、
　あめつちの境もわかで黒みわたるぞ物凄き。
しばし呆れて眺むれば、
頭(かしら)の上にうすらぐ雲の絶間より、
あらはるゝ心あり氣の星一つ。
たちまちに晴るゝ思ひに憂さも散りぬ。
　人は眠り世は靜かなる小夜中に、
　音づるゝ君はわが戀ふ人の姿にぞありける。

孤飛蝶

つれなき蝶のわびしげなる。いつしか夏も夕影の、葉風すゞしき庭面にかろく、浮きたるそのすがた。黒地に斑しろかねの、雙葉を風にうちまかせ花ある方をたづね顔。

春の野に迷ひ出でたはつい昨日、旭日にうつる菜の花に、うかるゝともなく迷ふともなく、廣野を狹まく今日までは。思へば今日までは怪しく過ぎにけり。いつのまに春は過ぎつゝ夏も亦た、あしたの宿をいかにせむ。

とは見る人の杞憂にて、蝴蝶はひたすら花を尋ね舞ふ。西へ行くかと見れば東へかへり、東へ飛んでは西へ舞ひもどる。うしろの庭をあさりめぐりて前なる池を一とまはり。秋待顔の萩の上葉にいこひもやらず、けさのあはれのあさがほにふたゝび三たび羽をうちて再た飛び去りて宇宙に舞ふ。

たれか宇宙に迷はぬものやあらむ。あしたの雨夕べの風何れ心をなやめぬものやあるべき。わびしく舞へるゆふべの蝶よひとりなるはいましのみかは。われもさびしくこの夏の、たそがれの景色に惑ふてあるものを。

秋風の樹葉をからさんはあすのこと。野も里もなべてに霜の置き布けば草のいのちも消えつきて、いましが宿もなかるべし。花をあさるは今のまの、あはれ浮世の夢なりけり。黄金積むもの、權威あるもの、たゞしは玉のかんばせの佳人とても、この夢に、もるゝはあらじ、あなおろかや。

ゆきだふれ

病床にありての作なるからに調(てう)も想(さう)も常にまして整はざるところ多し。讀者の寛恕を乞ふになむ。

○痞せにやせたるそのすがた、
　枯れにかれたるそのかたち、
　何を病みてかさはかれし、
　何をなやみて左(さ)はやせし。
○みにくさよ、あはれそのすがた、
　いたましや、あはれそのかたち、
　いづくの誰れぞ何人(なにびと)ぞ。
　里はいづくぞ、どのはてぞ。
○親はあらずや子もあらずや、
　妻もあらずや妹(いも)もあらずや、
　あはれこの人もの言はず、
　ものを言はぬは唖ならむ。
○唖にもあらぬ舌あらば、
　いかにたびゞとかたらずや。
　いづくの里を迷ひ出(で)て、
　いづくの里に行くものぞ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○いづこよりいづこへ迷ふと、
　たづぬる人のあはれさよ。
　家ありと思ひ里ありと、
　定むる人のおろかさよ。
○迷はぬはれを迷ふとは。
　迷へる人のあさましさ。
　親も兒も妻も妹(いもと)も持たざれば、
　闇のうきよにちなみもあらず。
○みにくしと笑ひたまへど、
　いたましとあはれみたまへど、
　われは形(かたち)のあるじにて、
　形はわれのまらうどなれ。
○かりのこの世のかりものと、
　かたちもすがたも捨てぬとは、
　知らずやあはれ、浮世人(うきよびと)、
　なさけあらばそこを立去りね。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○こはめづらしきものごひよ、
　唖にはあらでものしりの、
　乞食(こつじき)のすがたして來たりけり。
　いな乞食(こつじき)の物知顔ぞあはれなる。
○誰れかれと言ひあはしつ、

物をもたらし、つどひしに、
　物は乞はずに立去れと、
　言ふ顔にくしものしりこじき。
○里もなく家もなき身にありながら、
　里もあり家もある身をのゝしるは、
　をこなる心のしれものぞ、
　乞食のものしりあはれなり。
○世にも人にもすてられはてし、
　恥らふべき身を知るや知らずや、
　浮世人とそしらるゝわれらは、
　汝が友ならず、いざ行かなむ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○里の兒等のさてもうるさや、
　よしなきことにあたら一夜の、
　月のこゝろに背きけり、
　うち見る空のうつくしさよ。
○いざ立ちあがり、かなたなる、
　小山の上の草原に、
　こよひの宿をかりむしろ、
　たのしく月と眠らなむ。
○立たんとすれば、あしはなえたり、
　いかにすべけむ、ふしはゆるめり、
　そこを流るゝ清水さへ、
　今はこの身のものならず。
○かの山までと思ひしも、
　またあやまれる願ひなり。
　西へ西へと行く月も、
　山の端ちかくなりにけり。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○むかしの夢に往來せし、
　榮華の里のまぼろしに、
　このすがたかたちを寫しなば、
　このわれもさぞ哄笑ひつらむ。
○いまの心の鏡のうちに、
　むかしの榮華のうつるとき、
　そのすがたかたちのみにくきを、
　われは笑ひてあはれむなり。
○むかしを拙なしと言ふも晩し、
　今をおこぞと言ふもむやくし。
　夢も鏡も天も地も、
　いまのわが身をいかにせむ。
○物乞ふこともうみはてゝ、
　食うべず過ぎしは月あまり、
　何事もたゞ忘るゝをたのしみに、
　草枕ふたゝび覺ぬ眠に入らなむ。

みどりご

ゆたかにねむるみどりごは、
　うきよの外（そと）の夢を見て、
母のひざをば極樂（ごくらく）の、
　たまのうてなと思ふらむ。
ひろき世界（せかい）も世の人の、
　心の中（うち）にはいとせまし。
ねむれみどりごいつまでも、
　刺（とげ）なくひろきひざの上に。

平家蟹

友人隅谷某、西に遊びて平家蟹一個を余が爲に得來りたれば、賦して與ふるとて

神々に、
みすてられつゝ海そこに、
　深く沈みし是非なさよ。
世の態は、
小車のめぐりめぐりて、
　うつりかはりの跡留めぬに、
われのみは、
いつの世までもこのすがた、
　つきぬ恨みをのこすらむ。

かくれ家を、
しほ路の底に求めても、
　心やすめむ折はなく。
しらはたの、
源氏にあらぬあまびとの、
　何を惡しと追ひ來らむ。
まどかなる、
月は波上を照せども、
　この水底は常世暗。

あはれやな、
かしらの角はとがりまさり、
　前額のしわはいやふかし。
ふたもとの、
はさみはあれどこの恨み、
　斷ちきる術はなかりけり。
夢なりし、
むかしの榮華は覺めたれど、
　いまの現實はいつ覺めむ。

髑髏舞

某日、地學教會に於て見し幻燈によりて想を構ふ。

うたゝねのかりのふしどにうまひして
　としつき經ぬる暗の中。
枕邊に立ちける石の重さをも
　物の數とも思はじな。
月なきもまた花なきも何かあらん、
　この墓中の安らかさ。
たもとには落つるしづくを拂ねば、
　この身も溶くるしづくなり。
朽つる身ぞこのまゝにこそあるべけれ、
　ちなみきれたる浮世の塵。」

めづらしや今宵は松の琴きこゆ、
　遠の水音も面白し。
深々〳〵と更けわたりたる眞夜中に、
　鴉の鳴くはいぶかしや。
何にもあれわが故郷の光景を
　訪はゞいかにと心うごく。
ほられたる穴の淺きは幸なれや。
　墓にするゑたる石輕み。

いでや見むいかにかはれる世の態を、
　小笹蹈分け歩みてむ。
世の中は秋の紅葉か花の春、
　いづれを問はぬ夢のうち。」

暗なれや暗なれや實に春秋も
　あやめもわかぬ暗の世かな。
月もなく星も名殘の空の間に、
　雲のうごくもめづらしや。
天を衝く立樹にすがるつたかつら、
　うらみあり氣に垂れさがり。
繁り生ふ蓬はかたみにからみあひ、
　毒のをろちを住ますらめ。
思ひ出るこゝぞむかしの藪なりし、
　いとまもつげでこのわが身、
あへなくも落つる樹の葉の連となり
　死出の旅路にいそぎける。」

すさまじや雲を蹴て飛ぶいなづまの
　空に鬼神やつどふらむ。
寄せ來るひゞき怖ろし鳴雷の
　何を怒りて騒ぐらむ。
鳴雷は髑髏厭ふて哮るかや、
　どくろとてあざけり玉ひそよ。
昔はと語るもをしきことながら、

今の髑髏もひとたびは、
百千(もゝち)の男(をのこ)なやませし今小町とは
うたはれし身の果ぞとよ。
忘らるゝ身よりも忘るゝ人心、
きのふの友はあらずかや。」

人あらば近う寄れかし來れかし、
むかしを忍ぶ人あらば。
天地(あめつち)に盈(み)つてふ精も近よれよ、
見せむひとさし舞ふて見せむ。
舞ふよ髑髏めづらしや髑髏の舞、
忘れはすまじ花小町。
高く跳ね輕く躍れば面影の、
霓裳羽衣を舞ひをさめ。
かれし咽うるほはさんと溪の面(おも)、
うつるすがたのあさましや。
はら〳〵と落つるは葉末の露ならで、
花の髑髏のひとしづく。」

うらめしや見る人なきもことはりぞ、
昨日にかはれる今日の舞。
纏頭(てんとう)の山を成しける夢の跡、
覺めて恥かし露の前。
この身のみ秋にはあらぬ野の末の
いづれの花か散らざらむ。

うたてやなうきたる節の呉竹に、
迷はせし世はわが迷ひ。
忘らるゝ身も何か恨みむ悟りては、
雲の行來に氣もいそぐ。
暫し待てやよ秋風よ肉なき身ぞ、
月の出ぬ間(ま)にいざ歸(かへ)らむ。

古藤菴に遠寄す

一輪(いちりん)花の咲けかしと、
　願ふ心は君の爲め。
薄雲(はくうん)月を蔽ふなと、
　祈るこゝろは君の爲め。
吉野の山の奥深く、
　よろづの花に言傳(ことづて)て、
君を待ちつゝ且つ咲かせむ。

彈琴

悲しとも樂しとも、
浮世を知らぬみどりごの、
いかなればこそ琵琶の手の、
うごくかたをば見凝るらむ。
何を笑むなる、みどりごは、
　琵琶彈く人をみまもりて。
何をか囁くみどりごは、
　琵琶の音色を聞き澄みて。
浮世を知らぬものさへも、
　浮世の外の聲を聞く。
こゝに音づれ來し聲を、
　いづこよりとは問ひもせで。
破れし窓に月滿ちて、
　埋火かすかになりゆけり、
こよひ一夜(ひとよ)はみどりごに、
　琵琶のまことを語りあかさむ。

彈琴と嬰兒

何を笑(ゑ)むなるみどりごは、
　琵琶彈(ひ)く人をみまもりて。
何をたのしむみどりごは、
　琵琶の音色(ねいろ)を聞き澄(す)みて。
浮世を知らぬものさへも、
　浮世の外(そと)の聲を聞くなり。
こゝに音づれ來(き)し聲を、
　いづくよりとは問ひもせで。
破れし窓に月滿ちて、
　埋火(うもれび)かすかになり行けり。
こよひ一夜(ひとよ)はみどりごに、
　琵琶の眞理(まこと)を語り明かさむ。

螢

ゆふべの暉(ひかり)をさまりて
　まづ暮れかゝる草陰に
はつかに影を點(しる)せども
　なほ身を愧づる景色あり

羽虫を逐ふて細川の
　棧瀬をはしる若鮎が
靜まる頃やほたる火は
　低く水邊をわたり行く

腐草(ふさう)に生を享(う)けし身の
　月の光に照(てら)されて
もとの草にもかへらずに
　たちまち空(そら)に歸りけり

ほたる

ゆふべの暉(ひかり)をさまりて、
　まづ暮れかゝる草陰に、
わづかに影を點(しる)せども、
　なほ身を恥づるけしきあり。

羽虫を逐ふて細川の、
　棧瀬をはしる若鮎が、
靜まる頃やほたる火は、
　低く水邊をわたり行く。

腐草(ふさう)に生をうくる身の、
　かなしや月に照らされて、
もとの草にもかへらずに、
　たちまち空(そら)に消えにけり。

蝶のゆくへ

舞ふてゆくへを問ひたまふ、
　心のほどぞうれしけれ、
秋の野面をそこはかと、
　尋ねて迷ふ蝶が身を。

行くもかへるも同じ關、
　越え來し方に越えて行く。
花の野山に舞ひし身は、
　花なき野邊も元の宿。

前もなければ後もまた、
　「運命（かみ）」の外には「我」もなし。
ひら〳〵〳〵と舞ひ行くは、
　夢とまことの中間（なかば）なり。

眠れる蝶

けさ立ちそめし秋風に、
　「自然（しぜん）」のいろはかはりけり。
高梢（たかえ）に蝉の聲細く、
茂草（しげみ）に蟲の歌悲し。
林には、
　鵯（ひよ）のこゑさへうらがれて、
野面には、
　千草の花もうれひあり。
あはれ、あはれ、蝶一羽、
　破れし花に眠れるよ。

早やも來ぬ、早やも來ぬ秋、
　萬物（ものみな）秋となりにけり。
蟻はおどろきて穴索（あなもと）め、
蛇はうなづきて洞（ほら）に入る。
田つくりは、
　あしたの星に稻を刈り、
山樵（やまがつ）は、
　月に嘯むきて冬に備ふ。
蝶よ、いましのみ、蝶よ、
　破れし花に眠るはいかに。

破れし花も宿假（か）れば、
　運命（かみ）のそなへし床（とこ）なるを。
春のはじめに迷ひ出で、
秋の今日まで醉ひ醉ひて、
あしたには、
　千よろづの花の露に厭き、
ゆふべには、
　夢なき夢の數を經ぬ。
只だ此のまゝに『寂（じやく）』として、
　花もろともに滅（き）えばやな。

雙蝶のわかれ

ひとつの枝に雙(ふた)つの蝶、
羽を收めてやすらへり。

露の重荷に下垂るゝ、
　草は思ひに沈むめり。
秋の無情に身を責むる、
　花は愁ひに色褪めぬ。

言はず語らぬ蝶ふたつ、
齊しく起ちて舞ひ行けり。

うしろを見れば野は寂(さび)し、
　前に向へば風冷(さむ)し。
過ぎにし春は夢なれど、
　迷ひ行衛は何處ぞや。

同じ恨みの蝶ふたつ、
重げに見ゆる四(よう)の翼(はね)。

雙び飛びてもひえわたる、
　秋のつるぎの怖ろしや。

雄(を)も雌(め)も共にたゆたひて、
　もと來し方へ悄れ行く。

もとの一枝(ひとえ)をまたの宿、
暫しと憩ふ蝶ふたつ。

夕告(ゆふつ)げわたる鐘の音に、
　おどろきて立つ蝶ふたつ。
こたびは別れて西ひがし、
　振りかへりつゝ去りにけり。

露のいのち

待ちやれ待ちやれ、その手は元へもどしやんせ。無殘な事をなされまい。その手の指の先にても、これこの露にさはるなら、たちまち零(お)ちて消えますぞえ。

吹けば散る、散るこそ花の生命とは悟つたやうな人の言ひごと。この露は何とせう。咲きもせず散りもせず。ゆふべむすんでけさは消る。

草の葉末に唯だひとよ。かりのふしどをたのみても。さて美(あま)い夢一つ、見るでもなし。野ざらしの風颯々と。吹きわたるなかに何がたのしくて。

結びし前はいかなりし。消えての後はいかならむ。ゆふべとけさのこの間(ひま)も。うれひの種となりしかや。待ちやれと言つたはあやまち。とく〳〵消してたまはれや。

青空文庫情報

底本：「透谷全集　第一巻」岩波書店
1950（昭和25）年7月15日第1刷発行
1970（昭和45）年6月30日第13刷発行
初出：夢中の夢「女學雜誌」
1895（明治28）年10月25日号
朝靄の歌
（1890（明治23）年9月4日作）
春駒「女學雜誌」
1895（明治28）年10月25日号
春は來ぬ
（1891（明治24）年2月15日作）
地龍子
（1891（明治24）年6月9日作）
みゝずのうた「文學界　第十八號」
1894（明治27）年6月30日
一點星「女學雜誌　第二九八號」
1892（明治25）年1月2日
孤飛蝶「女學生　夏期號外」
1892（明治25）年8月22日
ゆきだふれ「白表・女學雜誌　第三三二號」
1892（明治25）年11月19日
みどりご「平和　第八號」
1892（明治25）年11月26日
平家蟹「國民之友　第一七四號」
1892（明治25）年12月3日
髑髏舞「文學界　第十七號」
1984（明治27）年5月30日
古藤菴に遠寄す「文學界　第三號」
1893（明治26）年3月31日
彈琴「文學界　第十八號」
1894（明治27）年6月30日
彈琴と嬰兒「平和　第十二號」
1893（明治26）年5月3日
螢「文學界　第五十八號」
1898（明治31）年1月1日
ほたる「三籟　第四號」
1893（明治26）年6月30日
蝶のゆくへ「三籟　第七號」
1893（明治26）年9月30日
眠れる蝶「文學界　第九號」
1893（明治26）年9月30日
雙蝶のわかれ「國民之友　第二〇四號」
1893（明治26）年10月3日
露のいのち「文學界　第十一號」
1893（明治26）年11月30日
※題名の「北村透谷詩集」は青空文庫で独自に付けました。
※上記底本より「楚囚之詩」「蓬萊曲」「蓬萊曲別篇」を除く全ての詩を、執筆年代順に収録しました。

※読点に白ゴマ点が使われている箇所は「；」で代用しました。ただし印刷のつぶれ、かすれ等により判断が難しい場合は「、」で入力しました。
※〔〕は底本の編集時に補われた箇所を表します。
入力：鈴木厚司
校正：土屋隆
2008年5月27日作成
2011年3月14日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北村透谷詩集

北村透谷

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/